Aomori Prefectural Community Education Center News

HIBIKI ひびき

青森県総合社会教育センター所報

第131号

令和8年2月26日発行

学校運営協議会委員に聞く！

学校を核とした地域づくり

コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進への取組

表紙の写真
家庭科の授業でミシンを囲み、真剣な眼差しを向けるこどもたちと、それを温かく見守る地域ボランティアの姿。
鶴田町立鶴田小学校

近年、こどもたちの学びと成長を地域全体で支える新しい仕組みとして、「コミュニティ・スクール（※以下、CSと略）」と「地域学校協働活動」を一体的に進める取組が広がってきています。

この動きは、学校と地域が協力してこどもたちの未来を育むための仕組みを築くことを目指したものです。

まず「CS」という仕組みは、H16年にスタートしました。これは学校の運営について地域住民が意見を出し合い、学校と地域が一緒により良い『目標を考える』場づくりをするものです。

また、「地域学校協働活動」は、H29年に法律に定められ、地域住民が学校と協力して、『目標に向けて行動を起こす』機会を広げる活動としてスタートしました。

この2つが組み合わさることで、「学校を中心にした地域づくり」が進んでいきます。この言葉には、ただ学校を支援するだけではなく、地域の皆さん自身が「学校と一緒にこどもたちを育てるパートナー（仲間）として参加する」という意味が込められています。

時代の変化が激しい今、こどもたちが安心して学び、成長していくには、地域・学校・家庭が同じ目標を持って協力する体制が求められています。

これにより、地域では「学びの場」や「世代を超えた絆」が生まれ、結果的にこどもたちが生きる力を豊かに育むことにつながります。そしてその過程で地域そのものも活力を得ていくのです。

青森県総合社会教育センターでは、こうした地域づくりを進めていく支援をしています。この特集を通じて、地域と学校が協力する新しい形にご興味を持っていただき、未来を担うこどもたちを育てるための一歩を共に踏み出していただければ幸いです。

学校運営協議会委員※に聞く

※学校運営に参画し、校長が作成した学校方針を承認したり、意見を述べることで、共に学校を作る役割を担っている委員。

「学校を核とした地域づくり」の実現に向け、CSと地域学校協働活動の一体的推進を担うキーパーソンとなる学校運営協議会委員の方々にお話を伺いました。（地域によって呼称が異なるため、今回取り扱う役職について説明します）

①「CS会長」とは、協議会の代表として多様な意見を集約し、学校・地域の対話（熟議）を統括するリーダー役です。

②「地域学校協働活動推進員」とは、学校の教育活動のニーズと地域の人材・資源を結びつける実務的な調整役です。

③「CSディレクター」とは、協議会での決定（将来像を具体的な協働活動へ落とし込むため、両者をつなぐ推進役です。

この3つの役割がうまく機能することで組織や協働活動が好循環を生み、持続可能な地域づくりの活性化につながります。

取材に協力していただいた方々のプロフィール

久保（くぼ） 千恵子（ちえこ） さん
八戸市立吹上小学校地域学校連携協議会会長（CS会長）
兼 父母と教師の会会長
八戸市吹上地区で長年、PTA活動に携わり、現在は両会長を兼務。保護者と地域の意見を大切にし、双方の視点や気づきを柔軟に取り入れながらこどもたちのために様々な提案をしている。

沢田（さわだ） 真田美（まゆみ） さん
鶴田町学校運営協議会委員
兼 鶴田町地域学校協働活動推進員
鶴田町で保育士・放課後こどもプラン指導員として勤務し、小中のPTA活動を長年経験された後、令和2年度の鶴田小学校統合時から、鶴田町地域学校協働活動推進員として活動している。

工藤（くどう） 知久子（ちくこ） さん
青森市立浦町中学校区学校運営協議会委員
兼 CSディレクター
青森市立浦町中学校区（小学校4校、中学校1校）のCSディレクター。地域学校協働本部を浦町中に置き、学期ごとに2～3回小中合同の学校運営協議会で、地域人材をつなぎ、地域づくりに貢献している。

CS会長

学校を助け、地域も助かる協働活動への架け橋 ――― 久保 千恵子 さん

保護者・地域の2つの視点 ～現場の「気づき」が生んだ協働活動～

八戸市では、CSの前身となる組織をH20年度から立ち上げ、R6年度からは各校のCSと地域学校協働本部の会議体を同一にして、年数回の協議会を行っています。（吹上小では年4回）

吹上小では、地域住民が全校縦割活動に参加したり、地元山車組と一緒に八戸三社大祭学習会を行ったりと、地域学校協働活動が盛んに行われています。

久保千恵子さんは、八戸市立吹上小学校のPTA会長と地域学校連携協議会会長（CS会長）を兼務しています。

PTA活動等で頻繁に学校へ足を運び、先生方の多忙さや、こどもたちの実態を肌で感じてきた久保さんだからこそ実現できた取組が、「ふきサポ（吹小サポーター）」の活動です。

同校では、保護者運営の「愛好会（部活動）」が盛んですが、毎週木曜日は授業終了から活動開始までに約1時間の空白があり、多忙な教員や働く保護者がこどもを見守ることが困難でした。そこで久保さんはすぐに学校や地域学校協働活動推進員と相談し、地域住民やOB・OGに協力を仰ぎ、この隙間時間の見守りを依頼しました。

その結果、毎週3～4名ほどのボランティアが、「ふきサポ」として、こどもたちの学習見守り体制が構築されました。また、「ふきサポ」は、特別支援学級での「生け花体験」「豆しとぎ（郷土菓子）作り」などの学習支援も行っています。

教員の働き方改革と地域防災を見据えた環境づくり

久保さんは、教員の働き方改革と地域活動の活性化を両立させる具体的な提案も行っています。

地域住民や愛好会、PTAの集まりで休日や夜間に学校施設（教室や会議室）を利用する際、教員に開錠等を頼らず、各団体が自分たちで施錠や警備システムの操作を行う運用の導入です。

これにより、教員の負担を減らしつつ、こどもたちが慣れ親しんだ学校を地域の活動拠点として活用することが可能になりました。久保さんは、防災の視点からもこどもたちには日頃から地域と「顔の見える関係」を築いてほしいと強調します。

学校を核とした地域づくりは、防災力の向上に加え、地域全体で「こどもの未来像」を共有し、共に歩む社会の形成にも寄与しています。

「ふきサポ」による生け花体験。

地域学校協働活動推進員

地域と学校が心を通わせ、こどもの未来を育む ――― 沢田 真田美 さん

地域資源が教科書！感動を生む「生きた学び」

鶴田町では、R3年度に鶴田町地域学校協働本部が同町教育委員会に設置され、R5年度から小・中学校にCSが導入され、年3回、町庁舎において学校運営協議会を合同で開催しています。

鶴田小学校では、町内6校の統合により開校してから6年が経ちました。沢田真田美さんは、同校の開校時から、地域学校協働活動推進員として学校と地域のつなぎ役を務めてきました。

同校の活動の核となっているのは、授業（総合的な学習の時間）と地域活動の一体化です。特に小学校5年生の活動では、こどもたちが「リンゴ栽培」「野菜作り」「獅子舞（しまい）」の中から自分の学びたいテーマを選択します。

リンゴ栽培では、地域の農家・下山さんの指導のもと、観察から収穫までを体験します。冬には、同じく地域の農家・中野さんの協力で雪の中に貯蔵した「雪室（ゆきむろ）リンゴ」を掘り出し、その場で割って食べる経験もしています。雪国ならではの知恵と味に触れたこどもたちの驚く表情は、今でも忘れられないそうです。

また、統合前の学校から引き継がれた伝統芸能「獅子舞」も、地域の方々の熱心な指導者によって守られています。地域の大切な宝を自分たちが受け継ぐという誇りが、こどもたちの表情を真剣なものに変えていきます。

「心の交流」が育む、活動の継続性

こうした活動を持続可能なものにするために、沢田さんが最も大切にしているのは、ボランティアの方々との「心の交流」です。活動が終わった後、談話室でお茶やお菓子を囲みながら、ホッと一息つく「お茶会」の時間を設けています。ここでは、活動の振り返りだけでなく、子育ての悩みや地域の話題に花が咲きます。また、年度末には必ず感謝の気持ちを直筆の手紙で伝えています。

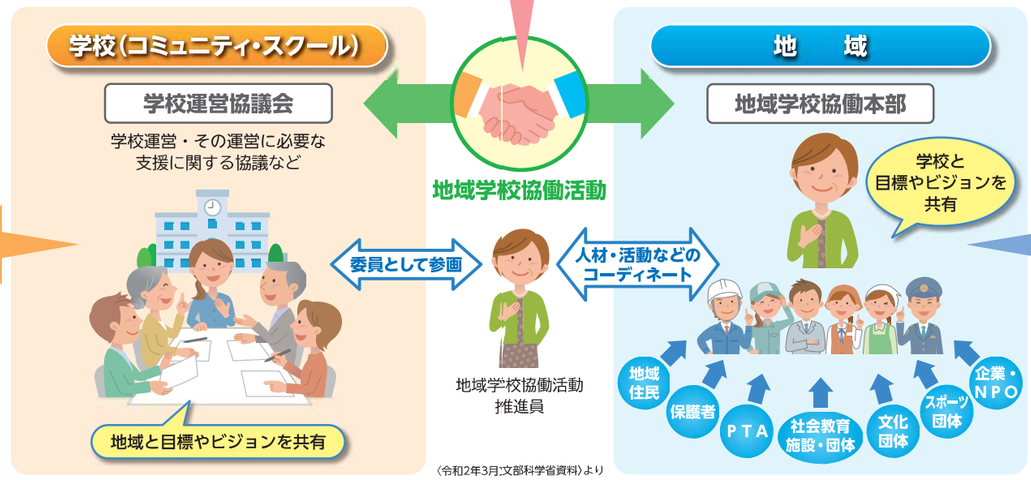
デジタル化が進む時代だからこそ、こうした顔を合わせた温かいコミュニケーションが信頼関係を深め、「また来年もこどもたちのために活動したい」という意欲の源になっています。

未来へ広がる「協働活動」の輪 ～町全体で共有する「こどもの未来像」～

「地域学校協働活動」の輪は、小学校の中だけにとどまりません。現在は鶴田中学校とも連携し、小中合同での「あいさつ運動」や、地域の方を交えた「ふるさと産品の日（生産者と児童が一緒に給食を囲む）」「合同避難訓練」など、世代を超えた活動へと広がっています。

沢田さんが目指すのは、地域・先生・保護者が「どんなこどもに育ってほしいか」という「未来像」を共有し、同じ方向を向いてこどもたちを育んでいく「一体感」です。こうした一つひとつの「活動」が、鶴田町のこどもたちの未来を創る確かな礎となっています。

【雪室（ゆきむろ）リンゴ体験】
雪深い中、農家・中野さんの協力で「雪室リンゴ」を掘り出し体験。白銀の下で糖度を増したリンゴの味に、生きた知恵を学びました。



〈令和2年3月文部科学省資料〉より

地域の大人が学校を通じてこどもたちと関わる取組

CSディレクター

地域住民が学校と関わる場を生み出し、活動を広げる ――― 工藤 知久子 さん

地域住民が気軽に集まれる場所「ほっとカフェ」の取組

青森市では、CSの前身となる組織をH20年度に立ち上げました。そして、R9年度までに、中学校区でのCSと地域学校協働本部の導入率が100％を達成する予定です。また「CSディレクター（統括的な立場で中学校区の全体調整を行う地域人材）」を配置し、活動を推進しています。

青森市立浦町中学校区でCSディレクターを務める工藤知久子さんは、20年以上にわたりPTA活動や学校支援コーディネーター、地域社会福祉活動など、地域社会に関わってきました。

「CSと地域学校協働活動の一体的推進」において鍵を握るのは「人と人をつなぐコーディネートをすること」と語る工藤さんは、学校運営協議会（CS）で熟議によって得られた将来像を、地域学校協働本部（実践）の活動へとスムーズにつなげる役割を果たしています。工藤さんがいつも大切にしているのは「地域住民がもっと学校に来やすくなること」です。

そこで、小学校の空き教室を活用した「ほっとカフェ」では、地域住民が気軽に集える場をつくり、そこから昼休みの見守りボランティアが生まれるなど、自然な形で学校と地域の接点を生み出しています。

地域住民との対話から生まれる中学生の「安心感」と「自信」

浦町中学校における「一体的推進」の象徴的な取組の一つが、工藤さんが企画・運営する「トーク・フォークダンス」です。

これは中学2年生と地域住民が車座になり、テーマに沿って対話する活動です。「失敗したことはありますか？」という生徒の質問に対し、地域の大人たちが自身の経験を語ることで、生徒からは「大人も失敗すると知って安心した」といった感想が寄せられました。

普段接点のない大人との対話は、生徒たちにとって「地域に見守られている」という安心感と「自分の思いを話せた」という自信につながります。

顔見知りとなり、地域との関わりを持つことは、生徒の自己肯定感を高めます。また、地域住民と中学生が触れ合う場づくりは「こどもの未来像」を共有する第一歩にもなっています。

未来の主役（こども）を地域で育む

もう一つの事例は、地域神社の「宵宮復活」の取組です。

工藤さんは、地域の高齢化や人手不足で途絶えていた祭りを「復活させたい」という地域の若手（30～40歳代）の声を受け、地域学校協働活動の一環として、10～80歳代の幅広い年代層からなる実行委員会を立ち上げました。

特筆すべきは、中学生がボランティアの枠組みを超え、実行委員として企画段階から参画した点です。

「お小遣いが少なくても楽しめるもの」という中学生のアイディアから「お菓子のつかみ取り」が実現し、当日は200名以上の笑顔が生まれました。

地域の課題に対し、中学生が自ら考え、大人と共に汗を流して解決に挑む。この「たくましく行動する姿」こそ、地域全体で共有すべき「こどもの未来像」ではないでしょうか。工藤さんの実践は、そんな未来の主役たちを地域で育む豊かな土壌となっています。

【「トーク・フォークダンス」】
円の内側が地域住民、外側が中学生。

青森県総合社会教育センター「伴走型支援」の紹介について

青森県総合社会教育センターでは、「CSと地域学校協働活動」をはじめ、様々な場面で市町村等への「伴走型支援」を行っています。

ファシリテーターを務める当センターの社会教育主事

八戸市立吹上小学校における学校運営協議会における熟議の様子

R7年度の取組事例

五戸町教育委員会●研修会講師選定及び研修会内容の指導・助言
東北町教育委員会●CS立ち上げについての指導・助言
おいらせ町教育委員会(2件)●研修会講師選定及び研修会内容の指導・助言
弘前市教育委員会(3件)●研修会内容の相談及び当センター講師派遣
青森市立莨町小学校●研修会講師選定
教育庁文化財保護課●オンライン配信機器接続の仕方について(社セ大研修室)
八戸市立城北小学校●CSにおける熟議の指導・助言及び当センター講師派遣
八戸市立吹上小学校●CSにおける熟議の指導・助言及び当センター講師派遣
つがる市教育委員会●研修会講師選定及び研修会内容の指導・助言
大鰐町教育委員会●CSにおける熟議の指導・助言及び当センター講師派遣
黒石市教育委員会●研修会講師選定及び研修会内容の指導・助言

Q 当センターが進める「熟議(じゅくぎ)」とは?

熟議とは、「熟慮」と「議論」を重ねて課題解決を目指す対話のことです。活発な議論により、的確に多くの人の意見を反映することができます。

課題を学校だけで抱え込んでしまうのではなく、保護者や地域住民等、多様な関係者と共に1つのテーブルを囲んで対話します。

新しいアイデアや考え方が生まれ、今後の方針を決めていく、たくさんのヒントが得られます。

「熟議」の流れ ～吹上小のケース～

1 テーマについて、意見を付箋に書いていきます。

熟議テーマ (例)吹上小学校
「人を大切にする心」を育むために、学校・家庭・地域ができることは?

2

付箋に書いた意見を模造紙に貼って交流し合います。

3 テーブルに1人残し、移動して意見交流を続けます。

【地域住民】大人の活動を見せる場を作ってみては?
【教師】道徳の時間に地域の話題を取り上げてみては?
【地域住民】異年齢の人たちと関わりを作ってみては?
【保護者】こどもががんばりたくなるしかけをつくってみては?

4

最後に、ファシリテーターが、付箋を分類してまとめます。

5

模造紙にまとめられた意見を元に、校長が図式化し、次年度の学校経営方針等に反映させていきます。

地域と学校が「対等」なパートナーへ

～八戸市立吹上小学校「熟議」の成果～

沼舘(ぬまだて) 寿朗(としあき)校長
八戸市立吹上小学校校長
「地域と共にある学校づくり」の実現に向けて、地域の意見を柔軟に取り入れ、学校と地域がパートナーとして、共に歩む学校経営を積極的に行っている。

Q1●先日行われた「熟議」の手応えはいかがでしたか。

校長●ただの話し合いではなく、地域住民・教員・保護者が対等な目線で語り合える、非常に密度の濃い時間でした。成功の背景には総合社会教育センターによる「伴走型支援」があります。ファシリテーター役(※①)のセンター職員が、地域の実情を肌で感じながら導いてくれたおかげで、参加者の間に一体感が生まれました。

Q2●木村泰子先生の特別授業(※②)での気づきを、「熟議」のテーマに直結させた点も素晴らしかったですね。

校長●はい。特別授業で明らかになった児童の実態や本校の課題を踏まえて、それらを『地域と共有すること』ができました。実は、昨年度の「熟議」で上がった地域の声を踏まえて、今年度「地域行事への参加」を重点目標として取り上げたところ、八戸三社大祭への参加児童が100名を超え、『地域と共有すること』の成果を感じています。

Q3●地域密着型教育コーディネーター(※③)の活躍も見逃せませんね。

校長●はい。アイデアを即座に実践へ繋げてくれています。「ふきサポ(放課後見守り)」など、地域の方が楽しみながら学校に関わる「w-n-w-n」な関係が築かれています。今後もこの一体感を大切に、学校経営方針へ地域の声を反映させ、学校と地域で共にこどもを育てていきたいです。

※①「ファシリテーター」…中立的な立場から議論を促進し、参加者の相互理解や合意形成を支援する進行役。
※②「特別授業」…木村泰子(きむらやすこ)先生(映画「みんなの学校」で有名な大阪市立大空小学校の初代校長)が来校し、5・6年生を対象に「みんなでつくる楽しい吹上小学校」をテーマとして行った特別授業。
※③「地域密着型コーディネーター」…地域学校協働活動推進員のこと。(八戸市における呼称)

編集後記

「一体的推進」の鍵 『こどもの未来像』の共有

今回の取材を通じて「こどもたちのために」という共通の想いが、地域と学校を一つにし、互いを支え合う力を生み出していることに気づきました。地域全体で「こんなこどもに育てたい」という想い(こどもの未来像)を一つにし、地域づくりの目標を共有することで、持続可能な取組が地域社会に根付いていきます。

当センターでは、今後も「CSと地域学校協働活動」をはじめ、「伴走型支援」を通じて各市町村の多様な取組をサポートしてまいります。この所報が皆様の地域における「人づくり・つながりづくり・地域づくり」を進める上で役立つヒントとなり、こどもたちの笑顔あふれる未来へとつながっていくことを心より願っています。

令和7年度 事業紹介

青森県総合社会教育センター

「CSと地域学校協働活動の一体的推進」に関わる事業

地域学校協働活動推進のための研修
地域学校協働活動推進員(地域コーディネーター)等を対象に、資質向上を図るための講義や演習を行う事業

生涯学習・社会教育関係職員研修講座 ～伴走型支援～
市町村教育委員会や公民館、CSや地域学校協働活動に関わる団体や学校を対象に、センターが実施する事業等のノウハウや、専門職としての知見や経験に基づいた指導・助言・相談等を行う事業

※詳しい事業内容等は、当センターのホームページをご覧ください。

編集発行
青森県総合社会教育センター
〒030-0111
青森市大字荒川字藤戸119-7
TEL.017(739)1252 FAX.017(739)1279

詳しくは [ホームページ] [Facebook] [Instagram]
SHAKAIKYOIKUCENTER

「HIBIKI」に関わるご意見は下記のアドレスへ
E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp
件名に「HIBIKI 131号」とご記入ください。

この印刷物は1800部作成し、印刷経費は1部当たり26円97銭です。